

蒙古語諸方言における

語頭 *i 音の発展

栗 林 均

1.

蒙古文語で単語の第1音節の *i* の後に *i* 以外の母音をもつ音節が続くとき、ハルハ方言では後続の母音が第1音節に「浸透」して ^ˈ*a*, *a*, *e*, *u*, *u*, *o*, *ö* 等、様々な母音が現れる。フィンランドの東洋学者ラムステッド (G. J. Ramstedt) が『蒙古文語とウルガ方言との比較音声学』(1903) の中でこの現象を取り上げて「折れ」(Brechung) と呼んで以来⁽¹⁾、少なからぬ研究者の関心がこれに向けられてきた。

その後の方言研究により、*i* の「折れ」はハルハ方言に限らず、近代蒙古語のどの方言にも多かれ少なかれ観察されることが明らかとなった。こうして *i* の「折れ」は、蒙古語音韻史のうえで、近代蒙古語を特徴づける大きな変化のひとつとみなされるに至っている⁽²⁾。

i の「折れ」は、しかしながら、近代蒙古語の諸方言に、同一の仕方で生じているわけでは決してない。何よりも、単語の第1音節の **i* がすべて近代蒙古語で「折れ」を被ったわけではなく、少なからぬ単語で *i* として保存されているのが認められるのであるが、どのような条件のもとに(どの単語で) **i* が「折れ」るかは、方言により一様でない。さらに、**i* が「折れ」る場合にも、その結果得られる第1音節の母音は方言間で必ずしも合致していない。

方言間の多様性は方言を方言たらしめるものであり、それだけでは、もちろん異とするに足りないが、ここでの問題点は、諸方言の多様性が必ずしも規則的な対応としてとらえられていないことにある。このためにラムステッド以来、**i* の「折れ」には多数の例外が付きものとされてきたのであり、それらの例外

はなんの説明も与えられずに看過されてきた。諸方言間の対応について、「すべての場合を包括する確かな規則をたてることは不可能である⁽³⁾」とするポッペ (N. Poppe) のことばは、研究の今日的な状況をよく物語っている。

しかし、そうした「例外」のうちにも発展と対応の規則性を見出すことは不可能ではない。筆者が最近の論考で指摘したように⁽⁴⁾、*i の「折れ」の諸方言間の対応の「例外」はそのほとんどが、ラムステッド以来のハルハ方言の「折れ」の図式を諸方言間の対応の説明に無批判に適用したが生じた、いわば分類の不備によるものである。さらに、伝統的なハルハ方言の「折れ」の図式自体が、タイプの異なる2種類の発展——つまり、なんらかの程度に *i の口蓋化の痕跡を残した「不完全な折れ」と、*i の痕跡が全く認められない「完全な折れ」——を混同した、きわめて不十分なものである。

愚見によれば、ハルハ方言の「折れ」には、少なくとも上に述べた2種類の異なるタイプの発展を区別すべきであり、諸方言間の対応もこの観点から改めて捉え直さねばならない。

ところで、これまでは、「折れ」が後続の母音に対する同化という観点から、「折れ」に作用する要因として、もっぱら後続の母音の種類にのみ注意が向けられてきた。しかし、「折れ」に影響している条件は後続の母音だけではない。後続音節に同じ母音をもちながら、*i が「折れ」て異なった母音が得られる場合も決して少なくないのである。「折れ」に際しては、上の条件に加えて、*i が語頭にあるか、子音のあとにあるか、また後者の場合、*i の前にあるのはどのような種類の子音かを合わせて考慮すべきであろう。さらに第1音節の*i と後続の母音との間の子音(群)の種類も「折れ」に無関係とは言えない。

本稿では、上の観点にもとづいて、*i が語頭に位置して、しかも第2音節に母音 *a をもつという一定の条件のもとで諸方言間の対応を検討しようとするものである⁽⁵⁾。

2—1

上に述べたようにハルハ方言の *i の「折れ」の図式は、しばしば他の諸方言をも含めた近代蒙古語の「折れ」の図式として採用されている。ラムステッ

ドは『蒙古文語とウルガ方言との比較音声学』(1903)のなかで、

「*a*の前の *i* > *i̇a, a*; 語頭で *jȧ, ja*」

という公式をたてて、蒙古文語の第1音節の *i* が後続音節の *a* の前に位置するとき、ハルハ方言では、*i̇a, a* が現れるが、語頭では *jȧ, ja* として現れることを示した⁽⁶⁾。同じ著者による『アルタイ言語学序説』(1957)では、「第2【音節】の母音の第1【音節】の母音に対する逆行作用」としてアルタイ諸言語における「折れ」が検討されているが、「第2音節の *-a-*, *-ä-* (または *-e-*)」の項目のなかで蒙古語について記すところは、次のようにハルハ方言の図式とほとんどその軌を一にしている。

「蒙古語は第1音節に *-i-* をもつ場合、通例、後続の *-a-* を先取りしたので *iCa* から *jaCa* が生じた。たとえば, moL *imagan* <山羊> kh. burj. *jamā*; moL *šiqā-* <圧す> kh. burj. kalm. *šax-*; moL *mingan* <千>, kh. burj. *m'anggan*;

第1音節の短母音 *i-* は、したがって、『折れ』によって二重母音となるか、あるいは絶対語頭では *ja-* に変化した⁽⁷⁾。」

このように、「**a*の前の **i*」の「折れ」を検討する際に、**i* が語頭に位置する場合と、それ以外の場合（つまり、**i*の前に語頭子音がある場合）とを区別して考えることは適当と思われる。この小論で取り上げるのは、このうち **i* が語頭に位置する場合である。

「**a*の前の **i*」が語頭に位置する場合の発展については、ポッペの『蒙古語比較研究序説』(1955)に、より多くの方言にわたる、次のような具体的な記述を見ることができる。

「【**a*の前の】語頭の **i* は、ダグール語、オルドス語、ハルハ語、ブリヤート語およびカルムイク語で *ja-* となるが、蒙古文語、中世蒙古語、モンゴール語およびモゴール語で *i* として残っている。.... 例:

Urd., Kh. *jamā*, Bur. *jamān*, Kalm. *jamān* 'goat' = Mo. *imayan*, MMo. (SH, Mu.) *ima'an*, Mong. *imā* id.

Kh. *janvk* 'beloved' = Mo. *inaγ* 'friend', SH *inaγ*, Mu. *inaq*, Urd. *inak* id. Kalm. *inḡ* 'friendship'.

Kh. *jarg^oē*, Kalm. *jarγä*, Mong. *järgē* 'Cornelian cherry' = Mo. *irγai*,
 Urd. *irgā* id.

Kh. *jalā* 'fly, gad-fly' = Mo. *ilaya* id. Urd. *ilō* < **iluya*, Bur. *jilāhan*
 'fly', Kalm. *ilēsñ~ilāsñ* id.⁽⁸⁾

ここでも、ハルハ方言の「折れ」の図式が近代蒙古語の諸方言に合致することが示されているが、ただ多くの古風な特徴を保存しているモンゴール方言とモゴール方言だけはこれにあてはまらないという。

2-2

ポッペが呈示している諸方言の対応を表にまとめると次のように図示することができる。

Mo.	MMo.	Mong.	Mog.	Dag.	Urd.	Kh.	Bur.	Kalm.
<i>i</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>

ところで、上の対応の図式は、ポッペ自らもそれに少なからぬ例外が存在することを認めているように、語頭の「*aの前の*i」の発展のすべてを覆い尽くすものではない。それどころか、新たに例を補うほどに、上の図式にあてはまらない「例外」が増えていくことが明らかになる。われわれは、何よりもまず、呈示された対応の図式にとって「例外」がどのようなものであるかを明らかにしておかねばならない。

「例外」は、ポッペの引用している4語の例のうちにもすでに現れている。上で引用される蒙古文語の *imaγan*, *inaγ*, *irγai*, *ilaya* の諸方言における語頭母音の対応を表にすれば次の通りである。

	Mo.	MMo.	Mong.	Mog.	Dag.	Urd.	Kh.	Bur.	Kalm.
<i>imaγan</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	—	—	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>
<i>inaγ</i>	<i>i</i>	—	—	—	<i>i</i>	<i>ja</i>	—	<i>i</i>	
<i>irγai</i>	—	<i>jä</i>	—	—	<i>i</i>	<i>ja</i>	—	<i>ja</i>	
<i>ilaya</i>	—	—	—	—	<i>i</i>	<i>ja</i>	<i>ji</i>	<i>i</i>	

諸方言の対応が、ポッペの図式に合致した斉一なものでないことは容易にみととれる。驚くべきは、モゴール方言とダルール方言の対応形が皆無のこと

で、これでは対応の規則性も不規則性も確かめようがない。さらにブリヤート方言の空欄に、Mo. *inaγ* に対して инаг 《любимый》を、Mo. *irγai* に対して яргай 《кизил》を補ってみると⁽⁹⁾、語頭の母音対応は錯綜していてそこになんらかの規則性を見い出すことが困難なほどである。

上の表で、ポッペの図式に合致している「規則的な」対応はといえば、(資料の欠けているモゴール方言とダグール方言は除いて) 蒙古文語の *imaγan* に対応する諸方言のあらわれである。加えて *irγai* に対応する諸方言のあらわれも、残りの2語に比して図式に合致するところが多いといえるが、*inaγ* と *ilaγa* に関しては、オルドス、ブリヤート、カルムイクのいずれの方言にも *i* があらわれていて、これが図式の重要な「例外」となっている。方言別にみると4例すべてに規則的に *ja* がみられるのは、ハルハ方言の場合だけであることは注目に価する。

3-1

ポッペの呈示した諸方言の対応のなかで特にハルハ方言の場合が規則的にみえるのは、そもそも「aの前の *i* > 語頭で *jȧ, ja*」という図式が元来ハルハ方言の図式としてたてられたものであったことを思い起こせば当然ともいえる。問題は、ハルハ方言以外の近代蒙古語の諸方言にもそれが同様にあてはまるとするラムステッドやポッペの説明が、具体的にどれだけの対応例の裏付けをもち、それに合致しない「例外」にどのような説明を与えるべきか、という点にある。

諸方言の具体的な対応例を検討するに先立ち、ここではハルハ方言の対応をより多くの例によって確認しておくことにする。というのは、ラムステッド以来、「aの前の *i* > 語頭で *jȧ, ja*」の図式はウラディーミルツォフ(Б. Я. Владимирцов)の『蒙古文語とハルハ方言との比較文法』(1929)においても、ポッペの『ハルハ・モンゴル語文法』(1951)においても繰り返されているものの、挙げられている実例は5指にも満たないのが実状だからである。それらは；

ラムステッドの例⁽¹⁰⁾ (2語)：

iragat > *jārāt* 'entblössend'

imagan > *jamā* 'Ziege'

ウラディーミルツォフの例⁽¹¹⁾ (2語):

imaγan > **imān* > *jāmā* 《коза》;

irγai > **irγai* > *jārgāë* 《жимолость》

ポッペの例⁽¹²⁾ (1語):

imaγan 'Ziege' = *jamā*

蒙古文語で、語頭の「*a*の前*i*」のもつ単語は、もちろん、これに限られているわけではない。レッシング (F. D. Lessing) の『蒙英辞典』には、語頭に*i*をもつ見出し語は528語を数えるが、このうち第2音節に*a*を有する語は152語にのぼる⁽¹³⁾。そのうち第2音節の*a*が*ayū* (>長母音)の連結をなすもの19語を除いて、単純に数えて133語が上の条件に合致することになる。もっとも、そのうちからハルハ方言に対応する語形のみい出せないものや、最近の外来語を除き、多くの派生語を語幹にまとめると、例として適当な語数は上の4分の1から5分の1くらいであろうか。

蒙古文語

ハルハ方言⁽¹⁴⁾

<i>idqa-</i>	《to persuade》	ятга-
<i>ila-</i>	《to defeat》	ял-
<i>ilaγa</i>	《fly, gnat》	ялаа
<i>ilaγai</i>	《speaking with a bur》	ялгай
<i>ilangγuy-a</i>	《specially》	ялангуяа
<i>ildar</i>	《occasion》	ялдар
<i>ilγa-</i>	《to distinguish》	ялга-
<i>ilamγai</i>	《weak-willed》	яламгай
<i>iljara-</i>	《to rot》	ялзар-
<i>imaγta</i>	《always》	ямагт
<i>inaγ</i>	《beloved》	янаг
<i>incaγa-</i>	《to neigh》	янцаа-
<i>injara-a</i>	《the young of the antelope》	янзга

<i>ira-</i>	《to cut open》	яр-
<i>iraγatu-</i>	《to ripple》	яраат-
<i>iralja-</i>	《to shine》	яралз-
<i>irbai-</i>	《to grimace》	ярвай-
<i>irjai-</i>	《to grin》	ярзай-
<i>ijara-</i>	《to condense》	язар-

このように、蒙古文語の語頭の「*a*の前の*i*」に対して、ハルハ方言では全く規則的に я (=ja) が対応している。ラムステッド以来繰り返し引用されている *imaγan* > *jamā* の例は、したがって、このような多数のかくれた対応例を適切に代表するものである。

ところでハルハ方言の場合、ラムステッドとウラディーミルツォフは語頭で *jä* と *ja* とを表記し分けている。これに関して、筆者は *jä* が「不完全な折れ」を、*ja* が「完全な折れ」を表すものではないかとの疑いを表明したことがあるが⁽¹⁵⁾、*jä* と *ja* の違いについてはなお将来の方言調査に俟つところが多い。

3-2

ハルハ方言の「折れ」を適切に代表する *imaγan* > *jamā* の例は、しかしながら、他の諸方言の「折れ」のモデルとしては「適切な代表」であり得ないのであるが、この点を次に見ていくことにしたい。

モスタールト師 (A. Mostaert) の『オールドス語辞典』の蒙古文語形索引によれば、それに採録されている蒙古文語形のうち、語頭に「*a*の前の*i*」をもつ単語は55語ある⁽¹⁶⁾。このうち第2音節の *a* が *aγu* (>長母音) の結合をなしている5語を除いて50語がここでわれわれの考察の対象となる。

それらの蒙古文語形に対応するオールドス方言の第1音節の母音をみると、*ja* があるのは蒙古文語の *imaγan*, *imaγatai*, *imaγatu* に対応する *jamā* 《chèvre》, *jamā'tā* 《ayant une chèvre》, *jamā'tu* 《=*jamā'tā*》の3語だけである。残りの47語のうち、*inaγsi* に対する *nāsi* 《vers ce côté-ci》を除くすべての単語で、オールドス方言の第1音節にあらわれている母音は *i* である。

蒙古文語	オルドス方言	
<i>idam</i>	<i>iDam</i>	《dieu tutélaire》
<i>idqa-</i>	<i>iDxa-</i>	《prohiber》
<i>iγcam</i>	<i>iG'ts'am</i>	《pressant(affaire)》
<i>ilaγa</i>	<i>ilō</i>	《taon》
<i>ilangγui</i>	<i>ilang^ui</i>	《plus que》
<i>ilari</i>	<i>ilari</i>	《guéri》
<i>ilγa-</i>	<i>ilga-</i>	《séparer》
<i>iljal-</i>	<i>ilDzal-</i>	《écraser (un objet mou)》
<i>imaγta</i>	<i>imaG't'a</i>	《uniquement》
<i>inaγ</i>	<i>inak</i>	《ami》
<i>incaγa-</i>	<i>ints'agā-</i>	《hennir》
<i>injaya</i>	<i>inDzaga</i>	《faon》
<i>ira-</i>	<i>ira-</i>	《ouvrir en coupant》
<i>irγacin</i>	<i>irga'ts'in</i>	《chasseur》
<i>irγai</i>	<i>irgā</i>	《espèce de chèvrefeuille》
<i>irjayi-</i>	<i>irDzā-</i>	《montrer les dents》

3—3

ブリヤート方言の場合も、事情はオルドス方言の場合とほとんど変わらない。ただし、蒙古文語の語頭の *i* に対応してブリヤート方言で *ja*(я) があらわれるのは、*ямаан*《козá》とその派生語に加えて *яргай*《кизи́л》をあげることができる⁽¹⁷⁾。これ以外は、オルドス方言と同様、ブリヤート方言の第1音節にあらわれている母音は *i*(и) にほかならない。

蒙古文語	ブリヤート方言	
<i>idqa-</i>	<i>идха-</i>	《внушáть》
<i>ila-</i>	<i>ила-</i>	《побеждáть》
<i>ilaγa</i>	<i>илааһан</i>	《мóшка》
<i>ilangγui</i>	<i>илангая</i>	《осóбенно》

<i>ildam</i>	илдам	《ласковский》
<i>ilya-</i>	илга-	《различать》
<i>iljara-</i>	илзар-	《гнить》
<i>imaγta</i>	имагта	《необыкновенный》
<i>inaγ</i>	инаг	《дружеский》
<i>incaγa-</i>	инсагаа-	《ржать》
<i>injāγa</i>	инзаган	《козлёнок》
<i>ira-</i>	ира-	《раздвигать》
<i>irbai-</i>	ирбай-	《недовольно морщиться》
<i>irγacin</i>	иргашан	《палач》
<i>irjai-</i>	ирзай-	《оскаливаться》

上の対応例をみれば、ポシュ (U. Posch)¹⁸⁾がいうところの

「蒙古文語の【第1音節の】*i*は【後続音節の*a*の前で】すべてのプライエート方言で*a*か、あるいは語頭で*ja*となった⁽¹⁸⁾。」

という説明が事実を反映したものでないことは明らかであろう。

3—4

カルムイク方言の場合には、事態はより込み入っているように見える。クリューガー (J. R. Krueger) の編集した、ラムステッドの『カルムイク語辞典』中の蒙古文語形の索引をみると⁽¹⁹⁾、語頭に「*a*の前の*i*」をもつ蒙古文語形は63語ある。そのうちから第2音節の*a*が *aγu* (>長母音) の連結をなしている3語を除いた60語がここで考察の対象となる。

上の60語のうち、カルムイク方言で第1音節に *ja* が対応しているのは次の4語である。

蒙古文語	カルムイク方言 ⁽²⁰⁾
<i>imaγan</i>	<i>jamān</i> 《zieg》
<i>irjai~iraγai</i>	<i>jarjā</i> 《pflanzennamen: anemone(?)》
<i>irbayi-</i>	<i>jarwā</i> ~ <i>jarwā</i> 《grinsen》
<i>irjāγar</i>	<i>jarzⁿγvr</i> 《mit gebleckten zähnen》

ところが最後の例には *irzvγvr*《die zähne zeigend》という形もみられるように、カルムイク方言では若干の単語の語頭で *ja* と *i* が交替している。

蒙古文語	カルムイク方言
<i>ira-</i>	<i>irxə~jvrxv</i> 《schneiden》
<i>irbalja-</i>	<i>irwlz^oxə~jarwlz^oxa</i> 《grinsen》
<i>irjaji-</i>	<i>irzāxə~jarzāxv</i> 《grinsen》
<i>itayi-</i>	<i>itāxv~jatixv</i> 《grimassen machen》
<i>iralja-</i>	<i>irlz^oxv</i> 《lacheln》~ <i>jarlz^oxv</i> 《in der ferne schimmern》
<i>irtayi-</i>	<i>irlāxv</i> 《grimassen machen》~ <i>jartāxv</i> 《griesgrämig aussehen》

上の例からもみてとれるように、語頭の *ja* と *i* との交替は、*r* 子音の前に集中している。(ラムステッドがあげている蒙古文語形 *itayi-* が *irtayi-* に関係していることは意味の上から明らかである。) 実際、*r* 以外の子音の前では、*jamān* を除き、例外なく *i* が対応していて *ja* との交替は認められない。

蒙古文語	カルムイク方言
<i>ica-</i>	<i>its^oxə, ils^oxv</i> 《hoffen》
<i>idam</i>	<i>idm, id^om</i> 《der geist, der den menschen schützt》
<i>ijara-</i>	<i>izrxə</i> 《dick werden (von flüssigkeiten)》
<i>ilayasan</i>	<i>ilēsn, ilāsn</i> 《mott》
<i>ilangruiy-a</i>	<i>ilngū, jilngū</i> 《besonders》
<i>ilya-</i>	<i>ily^oxa, il^okkv</i> 《ein unterschied machen》
<i>iljara-</i>	<i>ildzrxə</i> 《verfaulen》
<i>inarγ</i>	<i>inγG</i> 《freundschaft》
<i>incarya-</i>	<i>ints^oγāxv</i> 《wiehern (das pferd)》

カルムイク方言で、子音 *r* の前の *i* がすべての場合に *i~ja* となっているとは、直ちに断定することはできないが、こうしたあらわれに一定の規則性があることは確かと思われる。この方言で語頭に *ja* が現れる単語も、*jamān* のほかはいずれも *r* の前であることは (*jarγä, jarwä-, jarz^oγvr*) 注目に値する。

3—5

これまで検討してきたハルハ、オールドス、ブリヤート、カルムイクの4方言以外の蒙古語方言については、なんら確定的な結論を引き出すに足る資料が得られないのが実状である。

たとえば、モンゴール方言について、スメト・モスタールト(A. de Smedt, A. Mostaert)の『モンゴール・フランス語辞典』をみると⁽²¹⁾、語頭に「*a*の前の*i*」をもつ蒙古文語形に対応するモンゴール方言の見出し語は僅か8語である。これからさらに第2音節の*a*が*ayu*(>長母音)の連結をなしている3語を除いて、ここでの考察の対象となるのは次の5語がすべてである。

蒙古文語	モンゴール方言	
<i>ilya-</i>	<i>laGa-</i>	《choisir》
<i>imaγan</i>	<i>imā</i>	《chèvre》
<i>inaγsi</i>	<i>naGse</i>	《de ce côté-ci》
<i>iryai</i>	<i>yärGē</i>	《bois de sorbier》
<i>irjayi-</i>	<i>rDzē-</i>	《montrer les dents》

上の例で5語のうち3語まで、語頭の *i が消失している。ポッペのいうように語頭の *i がモンゴール方言で*i*として残っているのは、*imā* 1語にすぎない。

3—6

ダグール方言の場合も、ポッペの『ダグール方言』(1930)により⁽²²⁾、2～3の例が得られるにすぎない。

蒙古文語	ダグール方言
<i>ila-</i> 《побеждать》	<i>jala-</i> 《поднимать》
<i>ilya-</i>	<i>jalgā-</i> 《разпичать》
<i>ilyaγa ügei</i>	<i>jalgā üweī</i> 《безразлично》

上の例では、語頭の *i がすべて「折れ」ているが、さらにマーティン(S. E. Martin)の『ダグール・モンゴル語』(1960)により次の1語を追加することができる⁽²³⁾。

蒙古文語	ダグール方言
<i>imayan</i>	imaa 《goat》

3-7

モゴール方言について、*The Zirni Manuscript*⁽²⁴⁾をみると、次の2語が得られる。

蒙古文語	モゴール方言
<i>ilya-</i>	<i>ilya-</i> 《separate》
<i>irjai</i>	<i>irjai</i> 《black wood》

ちなみに、〈山羊〉を意味する語としては、*meilakci* 《goat》とあり⁽²⁵⁾、音形的に蒙古文語の *imayan* に対応する形は見い出せない。

モンゴール、ダグール、モゴールのいずれの方言の場合にも、ポッペの指示する資料によりながら、「折れ」に関するポッペの図式を確認することはできない。

4-1

語頭の **i* が **a* の前に位置する場合をとりあげて、それぞれの方言で対応する母音のあらわれを検討してきたが、このうちハルハ、オールドス、ブリーヤート、カルムイク諸方言の発展についてはある程度確かな結論を引き出すことが可能と思われる。

まず、「**a* の前の **i* > 語頭で *ja*」という従来の図式があてはまるのは、特殊な場合に限られているのであって、これを一般的な公式として受け容れることはできない。ハルハ方言以外の諸方言では上の図式にあてはまらない「例外」がむしろ圧倒的な多数を占めているのである。第2に、それらの多数の「例外」はきわめて規則的に *i* を保存しており、また諸方言間の対応も一貫している。それらは、ただ **i* > *ja* の図式にあてはまらないというだけで、決して不規則的な発展をしているわけではない。

**a* の前の位置で **i* > *ja* の公式が成り立つのは次の場合である：

- ① ハルハ方言で、すべての語頭。

② カルムイク方言で, *r (あるいは *r を含む子音) 群の前に位置する語頭。(しばしば *ja~i* の交替)

③ 特殊な例として4方言で, **imaɣan* に対応する語頭, 3方言で **irɣai* に対応する語頭。

上記以外の場合は, すべて *i* が現れる。

諸方言間の対応を表にまとめると, 次のようにあらわすことができる。

	Mo.	Urd.	Bur.	Kalm.	Kh.
* <i>imaɣan</i>	<i>i</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>
* <i>irɣai</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>
* <i>r</i> の前	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>ja(~i)</i>	<i>ja</i>
その他	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>ja</i>

上にみた, **i* > *ja* があてはまる①~③のうち, ①と②はそれぞれの方言内部における規則性であり, これに対して③は方言間を貫く現象である。この点で両者は全く性質を異にする発展であり, これを混同することは避けなければならない。

imaɣan* と **irɣai* の対応を除外して, 諸方言における語頭の **i* (a* の前) の発展を次のようにあらわすことができる。

「語頭の **i* は, オルドス方言とブリヤート方言で *i* として残り, ハルハ方言で *ja* となった。カルムイク方言では子音 **r* の前の位置で *ja*, あるいは *ja~i* の交替がみられるが, 他の位置では *i* として残った。」

4-2

ラムステッドやポッペによって呈示された, **i* > *ja* という公式を, 諸方言の対応の観点からみると, これにあてはまるのは **imaɣan* と (部分的に) **irɣai* の2語しかないことになる。これらは, 前節で確認された「規則性」からみれば, ごく少数の「例外」である。

例外にはなんらかの説明が与えられねばならない。

**imaɣan* (と **irɣai*) にみる諸方言間の「例外的な」対応の解釈には2つの可能性が考えられる。ひとつは, 語頭に *ja* をもつ形が諸方言に伝播した, いわ

ゆる「借用形」とする見方である⁽²⁶⁾。これは、たとえばオルドス方言だけを見ている限りでは、*ja*($\langle *i \rangle$)のあらわれは *jamā* だけであるから、これを他方言からの借用形として無理はないかもしれない。しかし、*jamā* の *ja* が、オルドス方言に限らず、プリアート方言にもカルムイク方言にも見いだされるとき、借用の可能性はそれだけうすくなる。ひとつの方言内では不規則なあらわれでも、方言間ではその現れが規則的だからである。3方言が、一様に *jamā* だけをハルハ方言から借用したと断定するには、さらに検討が必要である。

たとえば、蒙古文語の *mi-*(*a* の前) に規則的に対応しているのはハルハ方言で、*мя-*、オルドス方言で *mi-* である。ところが、*miqan*《肉》(とその派生語) だけは両方言で *ma-* が対応する：Kh. *max*, Urd. *maxa*。この場合、オルドス方言の *maxa* をハルハ方言からの借用形とすることはできない。なぜなら、ハルハ方言の *max* がそれ自体、ハルハ方言の中で例外的な発展であり、その由来こそが問題とされなければならないからである。**imayan* の発展もこれとの関係で検討すべきであろう。

もうひとつの解釈として、蒙古文語 *imayan* に対応する諸方言の形が、それぞれ断絶なく祖形を継承している、とする見方があり得る。これによれば、諸方言が一致して *ja* を有しているということは、これらの諸方言の分裂以前に **imayan* や **miqan* など若干の単語に生じた **i > ja* の「折れ」がそのまま諸方言に受け継がれていると考えることである。もちろん、諸方言が分裂以後にそれぞれ独自に **i > ja* の変化を被ったと考えることもできないわけではないが、こちらはよりありそうにない。

語頭の **i* (**a* の前) にこのような2種類のタイプの発展を認めることは、語頭以外の位置でハルハ方言の第1音節の **i* がタイプの異なる2種類の発展をとげている事実によっても支持される⁽²⁷⁾。つまり、**imayan* の語頭の **i* 音は、「完全な折れ」に数えられるべき発展であるが、ハルハ方言の場合には、さらに、より新しい時代に他の諸方言とは独立して語頭の *i* 音が *ja* (*ja?*) に変化したことにより、現代文章語では2種類の発展が融合して、その見分けがつかなくなったものと思われる。

(注)

- (1) G. J. Ramstedt, „Das Schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen,” *Journal de la Société Finno-ougrienne*, XXI: 2, 1903, S. 45-46.
- (2) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p. 16; 小沢重男「蒙古語の歴史と系統」服部四郎編『言語の系統と歴史』東京, 1971, 261-267頁。
- (3) Poppe, *op. cit.*, p. 37.
- (4) 拙稿「『*i の折れ』考——蒙古語における *i 音の発展の規則性と不規則性——」日本モンゴル学会『モンゴル研究』No. 12, 1981, 32-49頁。
- (5) 第2音節に *a がある場合でも, それが *ayu (>長母音)の連結をなしているものは, 別の系列に入るので, 除外して考える。
- (6) Ramstedt, a. a. O., S. 46.
- (7) G. J. Ramstedt, *Einführung in die Altaische Sprachwissenschaft I Lautlehre*, bearbeitet und herausgegeben von P. Aalto, *Mémoires de la Société Finno-ougrienne*, 104: 1, Helsinki, 1957, S. 160. なお, moL=蒙古文語, kh=ハルハ・モンゴル語, burj=ブリヤート語, kalm=カルムイク語。
- (8) Poppe, *op. cit.*, pp. 39-40. 略号表記は次の通り: Mo.=蒙古文語, MMo.=中世蒙古語, SH=元朝秘史, Mu.=ムカディマツト・アル・アダブ, Mong.=モンゴール語, Mo.=モゴール語, Dag.=ダグール語, Urd.=オールドス語, Kh.=ハルハ・モンゴル語, Bur.=ブリヤート語, Kalm.=カルムイク語。
- (9) К. М. Черемисов, *Бурятско-русский словарь*, Москва, 1973. による。なお同書には見出し語として иргай の形も採録されているが, そこには「яргайを見よ」とだけある。
- (10) Ramstedt, a. a. O., S. 46.
- (11) Б. Я. Владимирцов, *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия*, Введение и Фонетика, Ленинград, 1929, стр. 177.
- (12) N. Poppe, *Khalkha-Mongolische Grammatik, mit Bibliographie, Sprachproben und Glossar*, Wiesbaden, 1951. S. 10.
- (13) F. D. Lessing, *Mongolian-English Dictionary*, Indiana, 1973(rpt.), pp. 396-419.
- (14) А. Лувсандэндэв, *Монгол орос толь*, Москва, 1957. ただし янцгаа-とязар- は Я. Цэвэл, *Монгол хэлний товч тайлбар толь*, Улаанбаатар, 1966. による。
- (15) 前掲拙稿, 39頁。
- (16) A. Mostaert, *Dictionnaire Ordos*. seconde éd., New York・London, 1968

- (rpt.)pp. 783-784. ただし、すべてのオルドス語の見出し語に、対応の蒙古文語形が付されているわけではない。
- (17) К. М. Черемисов, Указ. соч. なお、蒙古文語形の *ilaγa* に対して илааһан という見出し語に加えて ялааһан という形も採録されているが、後者は「西部方言」形とのことわりがある。
- (18) U. Posch, "Zur Orthographie und Transkription des Burjatischen," *Central Asiatic Journal*, 1-2, 1955, p. 94.
- (19) J. R. Krueger, *Vollständiges schriftmongolisches Register zu Ramstedt's kalmückischen Wörterbuch*, Philadelphia, 1961. pp. 32-33.
- (20) G. J. Ramstedt, *Kalmückisches Wörterbuch*, Helsinki, 1976 (rpt.). 引用中のドイツ語の正書法(名詞語頭に大文字を使用しない)は、そのままとした。
- (21) A. de Smedt, A. Mostaert, *Dictionnaire monguor-français*, Peking, 1933, p. 508.
- (22) Н. Н. Поппе, *Дагурское наречие*, Ленинград, 1930, стр. 81-82.
- (23) S. E. Martin, *Dagur Mongolian: Grammar, Texts, and Lexicon*, Bloomington, Indiana, 1961, p. 171.
- (24) S. Iwamura, *The Zirni Manuscript: A Persian-Mongolian Glossary and Grammar*, Kyoto, 1961, p. 107.
- (25) *Ibid.*, p. 115.
- (26) 野村正良氏によればハラチン方言では蒙古文語の *imaγan* に対応して *ima:*, *jama:* の両形があるが、氏は後者を「他の隣接方言よりの借入とすべきであろう」としている。野村正良「蒙古語喀喇沁右旗王府方言の短母音」『民族学年報』第3巻, 1941, 11, 29頁。
- (27) 前掲拙稿, 47頁。
上記注(19)の文献は齊藤純男氏よりコピーをお借りした。記して感謝の意を表します。

(筆者の住所：千葉市高浜1-2 第2県営住宅6-108)